



## かんたんな漢方解説

補中益気湯	消化器を丈夫にし気分をやわらげやすい
十全大補湯	気、血、水の調和をはかり乾燥を防ぐ
当归飲子	乾燥を防ぎ血行をよくする
小建中湯	胃、肝、消化器の発育をうながす
黄耆建中湯	主として大腸とひふの正常化を促す
桂枝加黄耆湯	主として大腸とひふの正常化を促す
六味丸	胃が丈夫で乾燥性の人
当帰四逆加呉茱萸生姜湯	冬期冷えが大へんキツイ人
温清飲	しめりをつけ、ホテリをやわらげる胃の丈夫な人
荊芩連朮湯	化のう症の時に用いる
十味敗毒湯	化のう症の時に用いる
竜胆泻肝湯	全体に色黒に感じ、肝臓も悪い人
抑肝散加黄连	カユクていらしている時
越婢加朮湯	発赤してカユクて引かいてキタナイ汁の出る時
消風散	発赤してカユミのひどい時
治頭瘡一方	上半身のホテリがありカユイ時
白虎加人参湯	ひふがホテッて発赤カユミがひどい時
黄连解毒湯	内熱がこもって内からホテッてくる時
桂枝茯苓丸	成人性アトピーで生理不順、下腹部圧痛等ある時
桃核承気湯	成人性アトピーで体格よく生理少なく、うっ血状態の時

今回の集計の一部は「検査室から見た日本のアレルギー」としてインターネット  
(<http://www.mbc1.co.jp/allergy/allergy.htm>)  
で公開されている。地域や世代別の解析も図示され、患者にもわかりやすい。



## 2) カユミを軽くする、おさえる

=睡眠をとりやすく、イライラをとる=

内服：アタラックスP・セルテクト（抗ヒスタミン剤）

外用：

炎症 セオクイン膏・外皮用剤<sup>32-4</sup>（軽いステロイド）かゆみ アンダーム軟膏（非ステロイド）・エック10軟膏（大豆ケン化物）・アズノール軟膏・レスタミン

軟膏（抗ヒスタミン）・オイラックス

保湿 カサカサをうるおすもの

白色ワセリン・プロベト・セオオリーブクリーム・ノブオリゴマリン・ヒルドイド・ムーゲホワイト（尿素）・レベッカクインピアン・レベッカスキンエッセンス・ノンチエッセンス・モイスト・フレッシュ

清熱 ほてりをとる

あせもローションセオ・ルモンドベベローション・アロエゲル・プオリゴマリン等

## 3) かき傷の治療

=黄色ブドウ球菌で化のうしやすくなります。（ただし低刺激のもの）=

外用：セオRM軟膏・オードムーゲ・紫雲膏（漢方主成分）・タイツ膏（漢方主成分）

## 4) 洗う

=よごれをとるが、低刺激のもの=

ノブソープD・ルモンドDシャンプー・ルモンドボディシャンプーP・レベッカコントロールウォッシュ・備長炭を通した水。

## 5) 浴剤

=保湿・保温=

ノブ薬用バスモイスチュア・地膚子・ウチダ浴剤・ACUバスメイト・備長炭

## 6) 補促

=大事です=

<食べ物> 主食5、野菜海草いも3、豆、豆製品種実1、動物食品1が目安！

1 ご飯をきちんと食べる

2 発酵食品を常に食べる

（みそ汁、納豆）

3 パンの常食をやめる

（小麦アレルギーが増）

4 未精米のご飯を食べる

（玄米他7分づき、3分づき）

5 液体でカロリーを摂らない

（牛乳のとりすぎ）

6 副食は季節の野菜を中心に

7 動物性食品は魚介類を中心に

8 砂糖・油脂の摂りすぎに注意

9 出来る限り安全な食品を

（無農薬×遺伝子組替）

10 食べ物はゆっくりよくかんで

（今の子はかまない）

<生活の中の注意>

・シャンプー、リンス、石けん

・ヘア&スキン化粧品

・衣類、洗剤、洗濯機

・掃除機、掃除方法

・冷暖房機・ペット

・食事制限、抗体陽性食品

・自己診断、民間医療は注意

<ステロイド外用について>  
別紙参照下さい



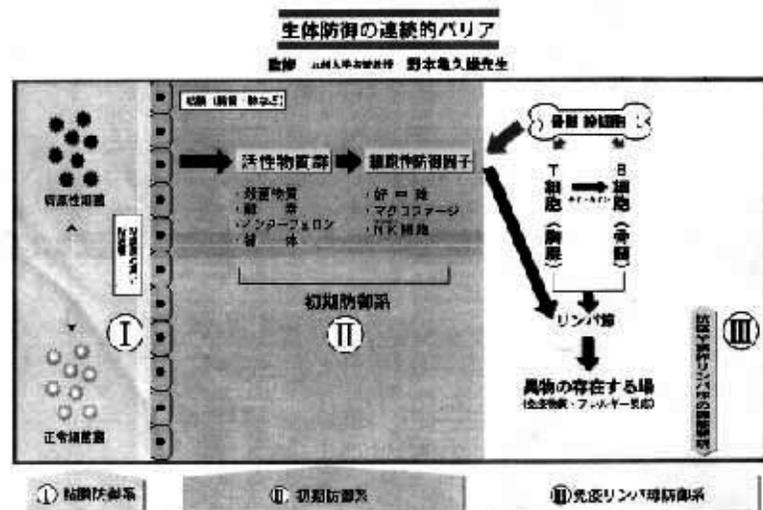
5) 最後に常識的なことをまとめましょう。

アトピーの人に仕組まれた抗体は外から入ってくる物質と反応を続けるので、化学合成品をさけることが基本です。然し考えれば、ぼう大な化学物質に埋まっているわけです。少し書いておきますヨ。乳児期に反応を示すのが、卵、牛乳、小麦などのタンパク質。あと新建材、塗料のアセトン、ディーゼルエンジンの排気、衣類の染料、穀物のくんじょう剤、殺虫剤、ストアー食品袋詰め、防腐剤、殺菌剤、農薬群。もう食べるものはないくらいです。然し、それらを理解していれば最小限、少なくすることは可能です。化学薬品は、大へん油にとけやすいので、油にとけ込んでいます。外食がおいしいのは「油」です。できるだけ台所でつくる。どこで絞った「油」かを知ることです。よくかむことが基本、3種の唾液酵素が化学物質の約70%を無毒化してくれます。そうすると牛乳、ジュース、パンでは、よくかめませんネ。そうです、和食にすることが添加物をさける最大のポイントなのです。和食の材料はみんな「大腸」をキレイにしてくれるものばかりでしょう。

最近の情報で(2000年)イギリス本土スコットランド地区でも、特に都会で、小児の喘息患者が 割以上の比率で発生しているとのことです。

(免疫学の一般的な用語である、免疫グロブリン、Igイムノグロブリン、M、G、A、Eとか、ハプテンとか、特異性などの用語は、大へん専門的なので、ここでは用いていません)

6) 下段の図、生体防御の連続バリアの下の方を参考にして下さい。病原細菌や異物は( )から( )を通過して最後に( )までくるのです。「異物の存在する場」(免疫物質、アレルギー反応)のところ、アトピーと思って良いでしょう。



協励会 浜松大会研修チャート



5 .アトピーの治療

1) かゆみを出さないための、体質改善

= 除去食に伴って、不足しているアミノ酸、カルシウム、緑を補い、体力を付ける =

レバコール(アミノ酸) 若甦(朝鮮人参) ササヘルス(クマザサ) バランスターZ(カキ肉エキス) タウロミン(総合皮フ薬) コンチーム(整腸) パナックス・ケイギョク(地黄・当帰・人参・麦門冬・茯苓)

「漢方薬」による治療

= 年令やかゆみの種類、皮フの状態によってベストなものを使い分ける。

気虚・血虚

- 補中益気湯
- 十全大補湯
- 当帰飲子
- 小建中湯
- 黄耆建中湯
- 桂枝加黄耆湯
- 六味丸

血虚・血熱

- 温清飲
- 荊荊連芩湯
- 柴胡桂枝湯
- 十味敗毒湯
- 竜胆泻肝湯
- 抑肝散加黄連

湿熱・血熱

- 越婢加朮湯
- 消風散
- 治頭瘡一方
- 白虎加人参湯
- 黄連解毒湯
- 排膿散及湯

駆瘀血剤

- 桂枝茯苓丸
- 桃核承気湯
- 通導散

当帰四逆加呉茱萸生姜湯

具体的な例をあげましょう。

例1 皮フにほてい熱感があり、かさつく。頭にも皮膚の脱落を伴うかゆみがある。(湿清飲 朝と昼と服用) (治頭瘡一分 夜一と服用)

例2 皮フにほてい熱感があり、かさつく。どちらかというと虚弱な身体である。(湿清飲 朝服用) (黄耆建中湯 昼と夕方と寝る前服用)

そうすると、

- 1漢方薬により治りを早めます。
- 2ステロイドなどの新薬を減らし、なくします。
- 3体質の改善をします。





## 1. アトピーがふえています

かゆみ、かさかさ、じゅくじゅく、ほこり、赤み、いらいら、かき傷がひどい、夜眠れない

## 2. アトピーの原因 (パート1) (私達は昭和30年を公害元年と位置づける)

戦後、食料の大増産の必要から、農業群の一大生産。文化の向上、食事・住居など環境の大変化、食事の洋風化、食べ過ぎ、高タンパク、高脂肪食、スナック、菓子パン、加工食品の増加、それらを可能にした食品添加物、学校給食の献立、エアコンや、温度調節の難しさ、アパート、マンション生活、カビ、ダニの発生、寄生虫(回虫)の減少、自動車の排ガス、運動不足、過労、化学製品増産、ストレス、ステロイド剤の頼りすぎ……もう大変ですネ。

## 3. 子供の10%がアレルギー、アトピーです!

## 1) 学校保健会での予言!

かゆみ、カサカサ、ジュクジュク、赤み、イライラ、かき傷がひどい、眠れない、今や生徒児童の割がアトピーやアレルギーといわれています。30年前に、学校保健会でいわれていたことが、現実となりました。なぜ?

## 2) アトピーいろいろ

- ・油のとりすぎ、タンパクのとりすぎで、体内がドロドロになっている。化学物質の一番とけ込みやすいのは「油」。
- ・早く「腸内」をきれいにしてやること。
- ・漢方では2000年の昔から「ひふと大腸」は同じですヨといっています。
- ・小学校にあがってゆくと「抗体」(身体の中のためこんでいる反応原因物質)がどんどん消えてゆく、と統計が示しているの、早く丈夫に成長させること。
- ・乳児期のものと成人性のものとあります。
- ・アレルギーの炎症で、毛穴がつまり、つまり汗腺がつぶされるので、発汗がなくなります。その部分はクーラーの働きがなくなり、真赤にほてってくるのです。

## 4. アトピーの原因 (パート2)もう少し深く考えてみる

1) 私達は昭和30年を公害元年と位置づけています。昭和30年代前後から、原因となるような物質が、ちまたにあふれます。引き揚げ船でシラミの駆除に、DDTやBHCを頭からふりかけます。戦前の人はどうもありません。今なら3割の人が「ひふ炎」を起こすでしょう。

砂糖不足で、ズルチンやサッカリンを多量に使用します。どうもなかったのです。食べ物を、キレイに見せるため、着色料をどんどん用います。例えば、漬物の黄色タートラジン、トーフの防腐剤、フラスキン。カビ止めや防腐剤の使用は、すさまじいものでした。それでも反応はあまり出ませんでした。



体質がよかったわけです。然しまあ、一部の人は「ガン」の発生が現れましたので、それらは現在、一部使用停止になっているのです。

然し、戦前の人たちの身体でも、それ等の化学物質は「怪しい」という認識はしています。先程の、「ガン」発生などは、細胞が認識して、爆発的に子孫をふやし出したものです。ガン発生までいかなかった人達の身体の中でも、少し細胞がイビツになり何か怪しいという認識を、次の世代に送りついでいます。永い生命のいとなみは、こうして生命体を生きる方向へとしたたかに「訓練」してゆくのです。これをなんとか「無毒化」しようとする「抗体」という、反応するしくみを作り上げていきます。これは、やがて次の世代にも引き継がれます。

2) 30年代以降に生まれた人達の子供。この時代になると、割の出現率で、トラブルが出てきます。アトピー、アレルギー、喘息等です。赤ちゃんは、胎内で、この反応物質を受けついで生まれますから、生まれて、外から「怪しい物質」が取り込まれたとき、反応するのです。

まず、母乳をとり込んで反応し、次に離乳食で反応する。乳児期よりのアトピーは親からのものと考えられます。思春期以降の成人性のアレルギーアトピーは、成長過程で、色んな原因物質を取り込んで、とり込み過ぎた為の反応と考えられます。少し難しかったですか?

## 3) ここで少し整理しましょう。

戦前(明治、大正、昭和初期の生まれ)の人々は、アレルギーを起す化学反応等の「抗体」がなく、それらは別のルートで反応し、肝臓ガンや、ひふガン等の発生を生んだのでしょうか。

数十年かけてとり込んだ微量の異物、一つや二つではありません。複合のもので、これらを抗体として認知し、それを遺伝子の初期のしくみの中で受け渡していく。そして30年代以降に生まれた人達の子供達に受け継がれ、割の人達の身体の中に「抗体」として仕込まれる。

仕込まれた割の人々の体内に、それに似た構造の物質がとり込まれた時、アレルギー反応として、ひふや内臓の一部(大腸など)に表はれはじめます。

4) これ等の反応は、異物(化学物質等)を、私達生体が、いかに警戒しているかという、生体防ぎょ反応ですから、生命の歴史の中では、至極当然の生体反応と考えてよいのです。

幸いなことに、人ゲノム(遺伝子情報)解析も終了したようです。新しい治療法もやがて、でてくるでしょう。今しばらく、知恵を出し合うことです。学校に上る頃になると、どんどん「抗体」がへって消えてくることは述べました。だから、早く、成長させることです。

